

## ② 部門の活動 [平成 30 年度の活動・特色ある業務]

全学教育機構では、それぞれの部門において、大学の中期目標・計画などに従い、特色ある活動を行っています。平成 30 年度の特色ある活動は以下のようになります。

### ○ 総合教育企画部門

本学では、大学教育再生加速プログラムの支援を受け、卒業時の質保証のモデルづくりを進めている。そのために、教育改革推進委員会、学務部と連携し、平成 30 年度は、以下のような業務を行った。

平成 30 年度については、これまでアドホック（臨時的・暫定的）に実施していた卒業時の質保証（内部質保証システムの構築、運用などの教育改善活動）を定例化・定型化することで、学内で日常の業務の中に「教育の質」を継続的に向上させる仕組みを整えることに注力した。特に、平成 29 年度の「データ収集」の体系化から一歩進め、各学部教員や各教育プログラムで自律的な改善活動を行うための「可視化された情報の提供」を円滑に行えるような仕組みの整備を進めた。卒業時の質保証のためにエンrollment・マネジメントの体制構築を進めているが、そのため iEMDB（茨城大学 Enrollment Management Database）というデータベースの整備、FD/SD システムという情報提供ツールの開発を進め、学内の教育改善情報の流通強化を図った。このことにより、必要なときに、必要な教育改善のための情報を、それを必要とする教職員に提供できる仕組みが整備された。

また、アドバイザーボードなど学外の方の意見や知見を教育改善や卒業時の質保証に活かす仕組みについては、ほぼ定着した。今年度は複数の学部で卒業研究ルーブリックの吟味なども依頼しており、卒業時の学修成果を測定する「ものさし」を地域の方々に確認、保証いただく仕組みが整いつつある。

これらの活動の結果、さまざまな場面（各年度、卒業時、卒業後など）での学生の諸活動の結果（学修成果を含む）が教職員に（ほぼリアルタイムに）数量的に把握できるようになった。これは、学生にとっても入学目的の実現のために、何がどこまでできたのか、という現状把握が可能になった、という意味でもある。これらを学内外で共有することで、地域や保護者の方も一体となった卒業時の質保証を行う体制が整備されつつある。

実施計画	結果と成果（全学の動き）
4月 「コミットメントセレモニー」や「はばたく茨大生」など、本学学生へキャリア教育を支援する企画を開催する。	入学式の際に、自校教育、初年次教育も兼ねてディプロマ・ポリシーを説明し、4年間の学びのデザインを考えさせる企画「コミットメントセレモニー」を行った。また、ディプロマ・ポリシーごとに特筆すべき活動を行っている在學生に、その取り組みを報告してもらうイベント「はばたく茨大生」を実施し、58名の学生がポスター発表を行った。 ↓

	<p>AP 事業により体系化された学生調査により、入学動機がやや曖昧な学生が一定程度在学していることが分かった。そのため、入学式の際に行う「コミットメントセレモニー」においてディプロマ・ポリシーや教育プログラムの解説を行うことで、新入生らに4年間の学びのデザインを構想させることができた。また、多くの保護者も同席することで、大学－学生－保護者との間でディプロマ・ポリシーと教育プログラムのねらいや特色を共有することができた。このような学修動機の再確認を全入学生が実施することで、卒業時の質保証のためのゴール設定と、そのプロセスの理解を図ることができた。</p>
<p>4 月 各教育プログラムにおけるカリキュラム・マッピングやカリキュラムツリー等の作成状況を確認、検証するため、FD ミーティングを実施する（7月までの間に各学部で実施）。</p>	<p>平成 29 年度末に前倒しで各教育プログラムにおけるカリキュラム・マッピングやカリキュラムツリー等の作成状況を全学部で確認した。これを受け、4月に全学の教育改革推進委員会において、FD を兼ねて各学部の取り組み状況を報告してもらい、全学的にカリキュラムを分かりやすく学生に提示しているかどうかの点検状況の確認および課題整理を行った。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>カリキュラム・ポリシーに照らして教育プログラムが展開されているかどうか、学生に分かりやすく示されているかどうかを点検することで、カリキュラムの点検を教員集団が自ら意識するほか、授業改善を促進することができた。また、カリキュラムの可視化により、学生がより自らの学びをデザインできるようにしたことで、学修成果の向上が、より明確に期待できるようになった。</p>
<p>4 月 学修成果についての卒業生等からの意見聴取（直接評価）結果について各学部に配信する。</p>	<p>ディプロマ・ポリシーの達成度について、卒業生（時）に聴取を行い、その結果の分析を行った。これらの結果を学内に公表し FD 等で活用してもらうだけでなく、各学部の教育改善を担当する教務委員長等で構成される教育改革推進委員会において報告を行い、全学的な議論および把握を行った。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>教育の内部質保証活動の中で学修成果の把握はもっとも重要な情報収集のひとつである。特に卒業時におけるディプロマ・ポリシーの達成状況の確認は、卒業時の質保証という観点からも重要である。卒業時の DP 達成度を全学的に測定し、共有することで、学年ごとの学修成果を把握することが可能になった。これによって、在学生の学修指導への基礎資料を各教員に提供することができ、より効果的な学修指導が行えるようになった。</p>
<p>4 月 卒業研究ルーブリックについて、先行して実施した学部の事</p>	<p>先行導入の工学部（JABEE）、農学部に続き、人文社会科学部、理学部において卒業研究ルーブリックの策定を行った。理学部においては今年度の卒論発表会から試行を開始した。</p>

<p>例を検証し、各学部、学科・コース等（カリキュラム）版の設計を開始する。</p>	<p>↓</p> <p>4年間の総合学修ともいえる卒業研究については、ほとんどの学部において教員個人の判断ではなく、教育プログラム全体でその質を保証する体制に移行しており、各教育プログラムで卒業研究（ひいては、4年間の学習）を保証する体制がほぼ完成している。</p>
<p>4月 学修成果の実態把握のため、各種アンケート（入学時、在学時、卒業時、卒業後及び学外）を行い、集計・分析する。</p>	<p>入口から出口までの学生の活動および成果を体系的に調査する仕組みを構築し、今年度も継続的な調査を実施した。</p> <p>↓</p> <p>調査結果を集計し、可視化、提供するだけでなく、本取組に係る成果や学生の傾向等、経年変化の分析を行い、各学部FDで報告することで改善の資料とすることができた。</p>
<p>4月 各種調査データを基に学修成果に関する数値情報を集約し取りまとめ、人材育成 Annual Report（学修成果ファクトブック）の発行に向けて準備する。</p>	<p>iEMDBの構築と平行して、それを可視化する仕組みの構築を開始した。この学修成果の可視化は、茨城大学FD/SD支援システム（仮称）の開発と、グラフの自動描画や簡易BIツール機能の実装によるもので、本学独自のシステムである。</p> <p>↓</p> <p>このシステムは、本学の教育の質保証の状況を共有するものである「電子版人材育成 Annual Report（学修成果ファクトブック）」へも応用した。実際に、既に複数の学部・教育プログラムにおいて、利用モニターによる運用試験を行っている。これによって、学生の学修状況調査の結果をほぼリアルタイムに全教職員に配信する仕組みが整い、学修指導・支援の体制が強化された。</p>
<p>4月 iOP推進チームを設け、先行実施学部の状況を検証し、iOP；internship off-campus programを構築する。</p>	<p>本学は、テーマIV（長期学外学修プログラム）の内容に相当するiOPを実施し、その成果も本学の卒業時の質保証に組み込んでいる。このiOPを実施するクォーター（3年次第3クォーター）では、原則として、必修科目を開講しない。このiOPをマネジメントするチームを設置し、情報共有およびiOPのプログラム（海外研修、インターシップ、サービスラーニング、発展学修）を開発し、学生の希望動向の調査や教職員がiOPを実施するうえでの支援策を構築した。</p> <p>↓</p> <p>ディプロマ・ポリシーに掲げた、例えば、コミュニケーション能力などは、課外活動などでより効果的に身につけているという調査結果もあり、この学外学修プログラムの導入により、学内（正課）ではカバーしにくい能力を向上させることが可能になった。</p>
<p>4月 学修相談室の改善と充実、教育効果の可視化による教育改善、自律的な学習者を</p>	<p>学修相談室については、全学的な実施状況の調査と整理を行い、より効果的な相談体制への改善を図った。また、今年度は特に初年時学生向けの学修相談についてwebサイトに整理、公表した。</p> <p>↓</p>

<p>目指した授業外学習環境の充実を進める。</p>	<p>授業外学修の支援として必要な情報が学生に行き渡るようにした。周知状況については、次年度の学生生活実態調査などで把握予定である。</p>
<p>5月 調査結果の蓄積システム（簡易型 BI ツール）の設計と運用を行い、社会のニーズを各教育プログラム（学内）にフィードバックするための情報提供を開始する。</p>	<p>各種学生調査結果の蓄積、閲覧を行う茨城大学 FD/SD システムについては、10月から授業アンケート部分について試行運用を開始し、2月から正式サービスを開始した。他の学生調査結果についても本システムから提供するようにして、情報提供の一元化を進めた。また、就職先からの本学卒業生の DP 達成度の調査も実施した。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>各教育プログラムを担当する教員がカリキュラム・ポリシーに沿った授業が展開できているかどうかを即時に確認できるようになった。また社会のニーズ（就職先から DP 達成度評価）により各教育プログラムの改善が進むと考えられる。</p>
<p>5月 担任など学生支援を行う教職員にこれまでの調査データを可視化の上、提供を開始する。</p>	<p>茨城大学 FD/SD システムを開発し、10月以降に実施した学生調査結果については、試行的に全教職員に可視化したデータの提供を開始した。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>入口から出口までの学生の成績や各種アンケート結果が連結され始めたことで、例えば、成績不振学生の学修履歴、アルバイト状況、悩みなどが容易に検索できるようになった。このことで、各学部、各教育プログラムにおいて卒業時の成果（例えば、就職先）とそれまでの学修履歴（例えば、学期ごとの GPA の推移）などを関係づけた情報に基づいて学修指導を行うシステムが確立した。</p>
<p>6月 キャリア教育により学修動機・意欲を向上させる方策を実施するため、学生調査の充実、結果の共有を関係部署と開始する。</p>	<p>キャリア教育を行う部署とは、学生調査の項目の調整などで協力を進めており、今年度についても協働で調査を実施した。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>キャリア教育は、全学共通教育と関連しているが、学部専門教育とも密接に結びつくよう、現状と課題を関係者で共有することができるようになった。</p>
<p>6月 来訪する卒業生からの意見聴取を行うフォーマットや情報の流れる仕組みを検討し、調整する。</p>	<p>卒業生からの意見聴取については、来訪する卒業生に全学統一フォーマットで聴取することを検討していたが、卒業3年後調査を定例化することで一本化することとした。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>大学に来訪する卒業生のみ意見聴取するよりも、毎年全卒業生に聴取する方が、その際に大学の取り組み等の情報提供なども合わせて実施できるようになった。</p>

<p>8月 各学部においてアドバイザーボード等を実施する。</p>	<p>各学部は学外有識者から構成されるアドバイザーボードを設置しており、それぞれ2回もしくは1回の会合を開き、内部質保証システムの点検や卒業研究ルーブリックなどの学修成果把握ツールの確認を行っている。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>改組の状況や今後の計画についても助言を得ることで、教育改善の動きをさらに加速させた。</p>
<p>9月 新教務情報システムを用いて学修成果を可視化し学生に提供する。</p>	<p>4月に新教務情報システムの運用を開始し、学生自身の通算 GPA、学期 GPA、学科内での成績ランクの情報を提供している。また、各種アンケート機能を用いて聴取した意見を集約して可視化した情報も学生に提供している。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>この可視化システムによって、学生自身が自分の学修成果の状況を確認して、自らが学修を改善・向上させることができ、場合によっては、教員との具体的な学修相談が可能となった。</p>
<p>9月 成績評価手法について分析を行い、各科目の成績評価の改善についてルーブリック化等のツールの導入を含め検討を行う。</p>	<p>卒業研究ルーブリックを進めているが、一般科目についても全学生必修の大学入門ゼミで導入している。一般科目分については、シラバスに簡易ルーブリック（成績区分ごとの成績評価基準の明確化）を掲載することについて検討を進めている。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>ルーブリックによる成績評価を卒業研究に導入したことにより、ディプロマ・ポリシーに基づいて、学生に対して客観性と公平性をもった評価を行うことができるようになった。</p>
<p>10月 一般科目の学修成果を「can DO」の形で明確に提示できるよう試行するなど、シラバス改訂の準備を進める。</p>	<p>シラバスの有効性や課題について全教職員、学生を対象に調査を行い、課題整理を行った。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>今後、学修成果を「can DO」の形で明確に提示できるよう検討を進めることで、学生により学びのデザインを構築しやすいシラバスとなることが期待できる。</p>
<p>11月 学修成果について卒業生やその就職先から意見聴取（直接評価）を行う調査を設計・実施する。</p>	<p>ディプロマ・ポリシーの要素・能力に関して、卒業後3年後の学生および就職先企業に対してアンケート調査を実施した。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>その調査・分析結果では、課題解決力とコミュニケーション力の面で、就職先の評価と比較して学生自身の評価が低いことがわかり、その能力の育成を強化する教育方法の検討が始まった。また、この結果は、学生とも共有して、教職員と学生との協働で、学修意欲や動機の向上を図ることが期待された。</p>

<p>11月 学修成果に関する数値情報を集約・分析し、人材育成 Annual Report (学修成果ファクトブック) を発行する。これを企業へ提供し、大学の学修成果に係る質保証の取り組みについてPRを行うとともに、あわせて意見を聴取する。</p>	<p>iEMDB という入口から出口までを1つのキーコードで追跡できるデータベースを開発することで、人材育成 Annual Report (学修成果ファクトブック) の基礎部分が完成した。</p> <p>↓</p> <p>社会に対して、本学学生の学びの状況を客観的な数値を用いて説明することが可能となり、本学卒業生の質を担保(広報)する材料となる。</p>
<p>12月 学修成果の測定法、改善への活用する仕組みについてガイドラインを作成し、内部質保証システムの本格導入を進める。</p>	<p>内部質保証システムの運用に際して、もっとも課題があるのは、データの流通である。そこで、データ配信システムを開発し、iEMDB の整備を進め、ガイドライン策定のための学修成果の測定方法の開発と検証を行っている。</p> <p>↓</p> <p>内部質保証システムは、それをルーティン化することがその実効性を担保することとなるため、自然な形で実施できるルール化とその実践試行を行っている。</p>
<p>1月 学修成果について教員からの意見聴取(直接評価)を行う調査を設計・実施する。</p>	<p>全教員、学務系職員、全学生を対象に、科目ナンバリングやクォーター制、自律的学修環境などに対する意見を聴取する教育システム実態調査を実施した。</p> <p>↓</p> <p>学修成果に関連する教育システムの現状と課題を把握・認識することで、今後の改善の方向性や方策を検討する材料とすることができた。特に、学生側は、クォーター制への移行に対して学修方法を柔軟に適応させていることが分かった。</p>
<p>1月 卒業研究ルーブリックについて、各学部、学科・コース等(カリキュラム)版の試行版を決定する。</p>	<p>人文社会科学部、理学部、工学部、農学部において卒業研究ルーブリックを策定した。学部によって、その活用(試行含む)の仕方に幅はあるが、順調に進行している。</p> <p>↓</p> <p>卒業時の質保証に際し、4年間の総合学修である卒業研究は、極めて大きな意味を持つ。この成果を可視化して、教員と学生が共有することによって、開かれた質の担保になったと言える。</p>
<p>2月 「コミットメントブック」「学修の手引き」「いばだいガイドブック」</p>	<p>内部質保証の諸活動のために学生に配布する資料(「コミットメントブック」「学修の手引き」「いばだいガイドブック」等)について、各学部の動きやこれまでの調査結果を踏まえ、改訂を行った。</p> <p>↓</p>

<p>ドブック」等を編集・作成する。</p>	<p>より効果的な質保証のためには、学生、教職員が教育目標やディプロマ・ポリシーを理解し、活用していくことが不可欠である。学修成果の把握の尺度として、ディプロマ・ポリシーの達成度を掲げており、これを学生が十分に理解することによって、自らの教育目標の精緻化にもつながることが期待された。</p>
<p>2月 近隣大学（東日本国際大学等）と連携し、勉強会（質保証・アセスメントセミナー）を開催する。</p>	<p>3月5日に福島県いわき市にある同じAPテーマV採択校の東日本国際大学と卒業時の質保証に関する公開勉強会を実施した。それぞれの大学で、実際の調査結果や業務システムの紹介を行い、それぞれのHow toや課題について情報交換を行い、互いの知見の共有を図った。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>実践事例の共有により、1大学では得られないさまざまな卒業時の質保証のための方法論などを得ることができた。</p>
<p>3月 各学部においてアドバイザーボード等を実施する。</p>	<p>各学部において学外有識者が委員となるアドバイザーボードを1回ないし2回実施し、教育課程の外部評価を行った。特に、卒業研究ループリックに重点を置いて、学外有識者が卒業時の質保証を確認する体制が確立した。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>アドバイザーボードによる教育課程の外部評価は、卒業生の質保証に客観性を付与するものと言える。</p>
<p>3月 教職員を対象に、FD/SD研修会を実施する。</p>	<p>3月28日、主に本学教員を対象に、授業改善のためのワークショップ型FD研修会「授業の基本」を開催し、若手教員を中心に32名の参加者があり、授業を行う上での基本的スキルを学ぶとともに、教材研究に係るグループワークなどを行った。また、学務系職員を対象にSD研修会を10月から3月まで全6回で実施した。今年度のテーマはエンrollment・マネジメントであり、エンrollment・マネジメントの概論および学内での取り組み事例（AP事業の成果）などに関する講義や考え方を学ぶための演習を行い、参加者はのべ59名であった。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>卒業時の、ひいては教育の質を保証するにはまず授業の本質的な質を確保する必要があり、講師を迎えた客観的な手法によるFDを行うことで、その基本から学び、考える機会を得、改善に資することが期待できる。また、教務や学生支援などに携わる職員が、エンrollment・マネジメントの概念やそれに附随する本学の取り組みを理解することで、卒業時の質保証のために自分にどのようなことができるのかを考えるきっかけとなった。また、全学的な質保証の動きの中で、</p>

② 部門の活動 [平成 30 年度の活動・特色ある業務]

	自分の業務の位置づけ、関連を他の部署のスタッフとの議論し理解することができた。
--	---

## ○ 共通教育部門

### (1) 初年次教育部会（情報）

#### ○ 部門の活動（特色ある業務）

##### ・ BYOD 対応準備

令和2年4月からの全学BYOD（Bring Your Own Device：PC必携化）の準備を進めた。下記のようなFD研修会だけでなく、平成31年2月21日（13：00～15：30）に、教育改革推進委員会、総合教育企画部門、IT基盤センターとBYOD全学FDを実施した。メイン会場を水戸キャンパスの図書館ライブラリーホールとし、日立・阿見の両キャンパスと結んで開催した。羽渕裕真学長特別補佐から、導入計画の概要や留意点を説明いただいた。BYOD授業事例報告を理工学研究科の鎌田賢教授、栗原和美教授から報告いただき、BYODの課題と他大学での取り組み例および本学での今後の展開について総合教育企画部門 嶋田敏行准教授が報告した。その後、質疑応答が行われ、活発な質疑応答が行われた（資料2-B-08）。

##### ・ FDの実施

平成30年12月11日10:30～11:30に情報リテラシーFDを実施した（全体の取りまとめ担当：佐藤）。参加人数は17名（2017年度情報リテラシー担当教員14名、その他3名）で、前半はBYOD特集として嶋田先生からの報告をもとに、実施に向けての課題に関する意見交換を行った。後半は、来年度のシラバス変更点についての議論を行い、授業改善に関する意見交換を行った。

### (2) プラクティカル・イングリッシュ部会

#### ○ 部門の活動（特色ある業務）

##### ・ 異なった特色のFDの実施

非常勤教員を含めた全体のFDの年に2回、部会員を対象としたFDを年1回実施し、教育効果の向上を図っている。全体FDは年度当初第1回として実施し、特に新規採用の常勤講師には、プログラム全体の理解、科目担当者との連絡および意見交換等の機会を提供する上で、大きな役割を果たしている。また、年度末には第2回として実施し、次年度に向けて、プログラム全体を再確認することと、年度の授業を振り返っての様々な意見交換を行う機会を科目ごとに提供し、プログラムの理解を深めることに加え、カリキュラム改善に資することを可能としている。2度の全体FDを行う間に部会員対象のFDを行っている。実施の方法としては、非常勤講師を含めた授業担当者へのアンケート結果に基づき、それぞれの科目における課題を明確にし、カリキュラム改善を図り、そこからプログラム全体の質的向上を図ることを意図している。今年度については、TOEICの得点の分析も踏まえて行い、プログラム全体とTOEICの得点について、深く考察する機会を得ることができた。

##### ・ 英語の会話力を向上させるための機会の提供

学生が個別に予約し、英語の聞く力および話す力を特に伸ばすことを可能にする機会を複数の担当者を設定し、提供した。複数の担当が存在することにより、学生は個々の都合に合わせて、予約をすることができ、それによって、より多くの学生に機会を提供することが可能

となっている。(資料 2-B-06)

- **個別に学習相談を行う機会の提供**

PE 部会のコーディネーターが中心となり、事前に予約の上、英語学習に関して様々な相談を個別に行う機会を提供した。このような機会により、学生の英語学習に関しての様々な悩みの解決を支援し、より効果的な学習方法を体得させ、自律的な学習者の育成につなげていくことが可能となっている。(資料 2-B-04)

- 関連イベントの報告

- **教育改革推進経費事業による自律学習支援**

授業外で自律的に英語の多読に取り組む環境を充実させる試みとして、教育改革推進経費による『自ら読む』自律的な学習者を目指して一多読環境充実による授業外学修支援プロジェクト」を実施した。これにより、読むことにおける自律学習支援の柱となりうる多読のための環境を充実させ、それを地域社会に対しても広く提供し、そこから地域貢献にもつなげることができた。(資料 2-B-07)

### (3) 心と体の健康部会

体力測定および生活習慣への意識改革に関する取り組み

(2018. 4、2018. 10 心と体の健康担当教員 9 名)

「心と体の健康」1 年生の受講学生約 800 名を対象として、体力測定の結果から、自身の生活習慣を振り返る小レポートを課した。体力測定では、文部科学省が提示する「体力運動能力テスト」を基本として、「長座体前屈」「反復横跳び」「立ち幅跳び」「上体起こし」の 4 種目を実施。各自の能力バランスを可視化され、体力年齢も表示されることから、実年齢との差に、学生は自身の生活習慣を振り返り、改める意識を向上させることが出来た。

授業改善に関する FD の実施 (2019. 8. 7 心と体の健康担当教員 6 名)

実技授業後の学生アンケートを踏まえて、授業改善のための FD を行った。学生アンケートの結果はおおむね良好だった。しかし、アンケートから「学習時間の確保が 30 分以上に満たない」という課題としてもち上がった。学習する時間を確保する案として、生活習慣記録表を記録させる案も出たが、そもそも学生自身が、復習や準備の時間を「学習時間」として認識していないのではないか? という意見も出された。授業を受けて興味を抱き、行動を動かすまでの準備段階 (インターネット検索、動画観賞等している時間) を学習時間と認識していないのではないかという意見も出された。また、例年挙げられているが、暑い時期の授業の実施について、エアコンの設置等、設備面での改善点が多数挙げられた。さらに、予算をかけずに改善できる可能性としては、酷暑時期の実技と講義の組み合わせ (気温が 30 度を超える場合には、講義に切り替える等) などソフト面の対策が必要であるとの意見が出された。

教科書の作成計画進行中『タイトル未定』(2019.年発刊予定)

(茨城大学 心と体の健康の研究会編)

現在、卒業単位数として「身体活動」が必修1単位となり、健康の領域については、「健康の科学」を受講しない限り、健康に関する学ぶ機会が確保されなくなった。その為、「身体活動」の時間に短い時間でも「健康」の領域について学ぶ機会を設けること、また、これまで課題であった、望ましい生活習慣の日常化を図る取り組みとして、教科書の改訂に取り組んでいる。発刊予定は、2019年度を目標に計画している。学生に伝えたい情報を「学生生活を支える健康」というタイトルで章としてまとめることにより、学生に「健康」の領域で学んでほしい内容明確に示せると考えている。また、「運動スポーツの理論と実践」というタイトルの章には、日常生活に活かせる運動の実施方法等についてまとめることとし、「社会のなかの運動スポーツ」というタイトルの章には、生涯を通じて学び続ける姿勢を育む為の情報を盛り込むことを予定している。

#### (4) 自然・環境・科学部会 (科学の基礎、自然・環境と人間)

##### ○ 部門の活動 (特色ある業務)

##### 1) プレスメントテストの作成、実施支援、統一授業のクラス分け

工学部の必修基礎教育科目科学の基礎「微積分学」「力と運動」のクラス分けのためのプレスメントテストとそのガイダンス支援のための説明書の作成と、その採点、及び採点結果をもとにしたクラス分けを行った(「微積分学」担当：小西、「力と運動」担当：山崎)。

##### 2) 統一授業 基礎教育科目 科学の基礎「微積分学」「力と運動」について

統一授業 基礎教育科目 科学の基礎「微積分学」「力と運動」について以下のような活動を行った(「微積分学」担当：小西、「力と運動」担当：山崎)

1. クラスの打ち合わせ会の運営
2. eラーニング教材の作成と改訂
3. 教科書の作成と改訂(編集委員会の立ち上げ、諸設定の検討を含む)
4. 期末試験問題の作成支援
5. 期末試験問題の全体および問題別の統計と全体成績の統計
6. 授業ノートとスライドの作成と改訂(力と運動のみ. 2019年度開講授業用だが、作成は2018年度中)
7. 過去の期末問題の整理と統計

##### 3) 科学の基礎質問室

入試の多様化や高校の学習指導要領の変更により、高校レベルの学習習得度格差が拡大し、高大接続のための学習支援が必要な学生は年々増大している。茨城大学では全学学生対象として教養の数学・物理学の習得度を底上げし、大学の教養レベルの該当科目にも対応できるようにすることを目的とし、修士、博士課程の学生を含む学部3年生以上の学生相談員(ピアサポーター)と教員相談員(小西、山崎)を配置して科学の基礎質問室を開室した。

(5) 多文化理解部会（異文化コミュニケーション、ヒューマニティーズ、パフォーマンス&アート）

■異文化コミュニケーション（初修外国語以外）

1) 活動（特色ある業務）に関して

①以下の短期海外研修を異文化コミュニケーション科目「多文化共生」として開講した。

- ・「短期海外研修ⅠⅡ（スペイン）」
- ・「短期海外研修ⅠⅡ（ブルネイ）」
- ・「短期海外研修ⅠⅡ（韓国）」
- ・「短期海外研修ⅠⅡ（マレーシア）」
- ・「短期海外研修ⅠⅡ（サンフランシスコ・ボランティア）」
- ・「短期海外研修ⅠⅡ（オーストラリア）」

2) 関連イベント

①海外留学説明会

5月16日（於：理学部インタビュースタジオ）に、(1) ①の短期海外研修を中心とした海外留学プログラムについての説明会を行った。

■パフォーマンス&アート

1) 活動に関して

各授業でどのような機材や道具を必要としているか、教員同士授業時間以外にも随時見学できるようにした。合奏、独唱、音楽鑑賞については、どの程度の音量で周囲に聞こえているかを体験した。また、美術用品の管理などを通し、水戸キャンパス以外での開講について問題点を話し合った。

他の分野の授業を相互に理解することで各教員が担当する授業の特徴を知り、より充実させることができた。特に日にちを設定せず、常に情報交換をした。

2) 関連イベント

「水戸芸術館で学ぶ」では、音楽12月23日「池辺晋一郎監修・クリスマス・プレゼント・コンサート」、美術1月17日「水戸芸術館・施設見学、美術鑑賞」、演劇2月16日「柳家喬太郎独演会」の他に、12月13日「フォルテピアノ～ワルター、エラール、スタインウェイ」として3台のピアノを弾き分けるという特別なコンサートの回を設定してもらい鑑賞を行った。

(6) 社会と生活部会（グローバル化と人間社会、ライフデザイン）

○「社会と生活部会」の活動

- ・平成31年6月12日に「社会と生活部会」において平成30年度前学期および後学期開講の基盤教育科目「グローバル化と人間社会」に関するFDを実施した。とくに今後の課題として認識された点は、履修学生に対して授業外学修時間の積極的な取り組みを促進することであった。この点、前学期、後学期ともに担当教員によるバラツキが見られた。そこで部会において授業外学修時間の積極的な取り組みを部会で平均化していく工夫が必要だと認識した。この点において具体的かつ効果的な促進方法を検討して、部会全体にそれをFDや多くの担

当教員集団が構成メンバーである人文社会科学部の「旧学科会議」等に反映していくことを検討している。

- ・基盤教育「グローバル化と人間社会」の授業において「文理融合型」の科目を配置することが可能かどうかを、隣接する「自然・環境・科学部会」と議論しているところである。茨城大学において現状では「文理融合型」の授業科目があまり見られない故に、積極的に検討していく価値があると考えている。

## (7) グローバル英語プログラム部会

### ○ 部門の活動（特色ある業務）

中期目標達成のための方策として、GEP 運営上の問題点とその解決策について、GEP 専門部会会議を通して協議してきた。中期計画の目標は、GEP 受講者が2年次生320名(学年1600名の20%)であるのに対して、現状は87名(2年次生総数の5%)であった。平成30年度のGEP対象者数(TOEIC550点以上)は250名)であり、前提となるGEP受講対象者数の増加については、英語力の高い入学者を求める必要性や全体的な英語力の底上げの必要性が指摘された。また、履修促進の方策としては、GEPに対する理解、認知度が低いため、内的(シラバス精査)、また外的(PR活動)アプローチを用いる必要があげられた。ビデオPR及びGEPを受講するインセンティブの強化が検討された。

### 1. GEP履修促進の方策(GEPの現状と改善点)

各学部のGEP科目の充実(専門科目を含む)

#### (1) 学習者のニーズ分析によるシラバス改善

第4クォーター終了時にGEP受講生を対象としてDream Campus上でアンケートを実施した。主な内容はGEP科目履修の動機、満足度、要望等。集計・分析は平成31年度とする。

#### (2) 受講学生の英語力の二極化による授業難度の設定検討

プログラムの導入により受講学生の英語力の二極化により授業難度の設定に支障をきたしていることがアンケート結果及び授業担当者から問題点として挙げられた。そこでGEP科目の中で、例えばTOEIC800点以上の上級レベルとTOEIC600点程度の英語力を対象とした中級レベル設定をし、シラバス等で明記することでより受講学生の英語力に合致した授業構成を図ることが対応策のひとつとして挙げられる。

#### (3) PR(授業紹介ビデオ撮影)

分かりやすいシラバスやプログラム概要を学生に伝えられるようにする必要があることから第4クォーター終了時に授業風景(授業担当:瀬尾先生)の動画撮影をした。今後ガイダンスやHP掲載を通してPRする。

#### (4) インセンティブ強化の検討

大学院入試の際の利用の可能性について機構・全学教務委員会へ提言を検討する。また、農学部のAIMSプログラム参加のように、各学部でのGEP受講メリットが明確になると効果的である。更に、他大学、他学部を参考にしながら留学プログラムの充実を図る(例:千葉大学の全員留学制度や、茨大農学部国際職産業コース全員の留学制度)。GEP終了学生が

学生間で認知されることにより他の学生のモチベーションを喚起する。更に全学教育機構の HP や「茨城大学コミットメント」等での GEP 受講者の記事や写真掲載を検討する。

## 2. GEP の質保証

GEP 各科目のシラバス、内容等についてはガイドラインに基づき授業担当者個人に任されている。質保証という点でシラバスチェックによる現状把握が必要であるため、令和元年度分のシラバスより GEP 部会によるシラバスチェックを実施した。評価方法については、GEP の評価基準を設けて次年度の評価の適正化に努めることとする。またネイティブの担当者も多いことから、ガイドラインの英語版を作成し、GEP 各授業の質的向上に努めることとした。

### (1) GEP 授業担当者の確保と授業改善

GEP 授業担当者について、水戸地区は人文社会科学部教員が中心であるが、阿見地区、日立地区とも非常勤に頼っている。まず、学生の声をいかした授業を行える先生の確保が重要である。プログラム自体の訴求力を上げるために、各科目で改善し続け、学生にとって意義あるものを提供することが重要。AE IIIC は、GEP へ段階的な準備を行うブリッジ的存在になるように、授業内容の改善や差別化を継続して行う必要がある。

### (2) 平成 31 年度用シラバスチェック

平成 30 年度に開講している GEP 科目のシラバスの形式については確認されているが、内容の確認作業が行われていなかった点を踏まえ、クオリティコントロールの観点からシラバスチェックを下記の通り実施した。

GEP 科目シラバス	担当部会員
TOEIC and TOEFL 3 科目、English for Socializing 2 科目	小林
Studies in Particular Fields 5 科目 (瀬尾先生担当分以外)	木村
Studies in Particular Fields 1 科目、Studies in Contemporary Japan 1 科目、Presentation in English 3 科目	瀬尾
Studying Abroad 1 科目、Academic Writing 3 科目	塚田
Bilingualism 2 科目、Academic Speaking 3 科目	館
Reading & Discussion 4 科目	菊池

### (3) 「GEP プログラム科目概要・補足説明」の英訳

GEP 科目の質的な向上を図るため、英語のネイティブスピーカー教員用に、各部会員が分担して「GEP プログラム科目概要・補足説明」の英訳を部会員全員で確認した。

## (8) 日本語教育プログラム部会

### (1) 活動 (特色ある業務) に関して

外国語としての日本語を指導するために必要な専門知識と基礎能力の習得を目的としたプログラムである。人文社会科学部と教育学部の学生を対象としている。人文社会科学部のサブメジャ

一になっている。

◎ 日本語教育プログラム「日本語教授法演習(海外)」

「日本語教育プログラム」の最終科目で、教育実習を含む「日本語教授法演習(海外)」の実施校にウィスコンシン州立大学、アイダホ州立大学、レンヌ第一大学が2017年度から加わり、7校となった。また、同科目は「海外協定校におけるインターンシップ型日本語教師養成プログラム」として日本学生支援機構の平成30年度海外留学支援制度(協定派遣)短期研修・研究型(タイプA)に採択された。

2018年～2019年の約一年間、ブルガリアのソフィア大学とタイのトゥラキットバンディット大学にそれぞれ1名が留学し、「日本語教授法演習(海外)」の授業の一環として日本語クラスで実習を行った。

(2) 関連イベントの報告

①ブルネイ・ダルサラーム大学との授業交流

ブルネイ・ダルサラーム大学で日本語授業を履修している学生と、同プログラム「日本語教授法Ⅰ」を履修する学生とのオンラインによる学生交流を行った。

②ウィスコンシン州立大学スペリオール校との授業交流

ウィスコンシン州立大学スペリオール校で日本語授業を履修している学生と、同プログラム「日本語教授法Ⅰ」「日本語教授法Ⅱ」を履修する学生とのオンラインによる学生交流を実施した。

(9) 地域志向教育プログラム部会

1) 部門の活動

①「茨城学」の推進

4年目を迎えた全学生必修の「茨城学」については、共通教育機構初年時教育部会での運営が2年目となり、コーディネーター3名の体制下で実施した。グループ分けして行ったワークショップでは、全体の運営、各グループへのファシリテーションなど役割を担いながら、きめ細かな指導を行うことができた。具体的な企画を立てるにも、コーディネーターは、それぞれ、地域づくり、交流、経営といった分野の専門性と実践経験が豊富であったことから、学生からの質問に対してより実践的なアドバイスをすることができた。加えてワークシートを「事実の確認」「課題に対する考察」「グループディスカッションでの気づき」とステップを踏んだ構成・レイアウトに改善することで、思考法の獲得と授業テーマの定着を図った。内容的には(株)鹿島アントラーズFCに新規に登壇いただいた。受講生は全学部1669名であった。

②「5学部混合地域PBL」の実施

全学共通科目の「5学部混合地域PBL」は、従来からのⅠ、Ⅱ、Ⅲに加え、平成30年度はⅣが新たに開講された。この新設により、本学全体での地域志向科目数は89科目となった。以下に今年度から開始したⅣを重点的に、H30年度の実施概要を報告する。

5学部混合地域PBLⅠ(1年生以上対象、連携先：ひたちなかまちづくり株式会社ほか)、同Ⅱ(2年生以上対象、連携先：株式会社サザコーヒー)、同Ⅲ(1年生以上対象、連携先：

茨城県、常陸大宮市) を、いずれも夏季集中の形式で例年どおり実施した。それぞれ 31 名、34 名、28 名の受講生であった。

今年度から開講した「5 学部混合地域 PBL IV」は、茨城県国際観光課及び茨城県国際交流協会の協力を得て、外国人留学生と日本人学生が協働で海外に向けて茨城をアピールするプロジェクト型の PBL 授業である。平成 30 年度の前期に 5 学部の 1 年生以上を対象に行った。最大の特徴は授業が全て英語で開催された点である。日本人学生 18 名、留学生 8 名の計 26 名が参加し、茨城県を PR する動画を作成し、本学グローバル教育センターの YouTube ページで公開した。公開された動画の画像を以下に例示する。

写真 1 茨大生活の紹介



写真 2 納豆の紹介

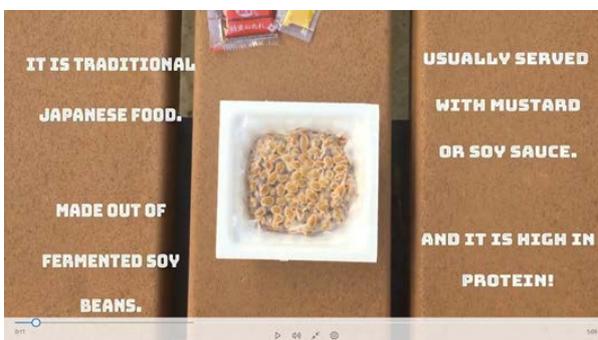


写真 3 龍神大橋とバンジージャンプ



写真 4 笠間焼



## 2) 関連した活動

「5 学部混合地域 PBL I」受講生グループの中から、学修フィールドとなったひたちなか市での地域活動に取り組みたいとして、「ぴたっとひたちなか」という 1 年生 4 人のグループが誕生し活動を続けている。ひたちなか市にぴたっと密着する意味が込められている。

まず取り組んだのが、ひたちなか名産の干し芋について、なぜ若者に人気がないのか、干し芋という名前に問題があるのではないかという視点から、「干し芋に関するアンケート調査」(12 月 25 日～12 月 31 日・ネット調査 100 件規模の解答)を実施した。干し芋は好きで食べたいけれど、価格やイメージ、干し芋という名前などが、干し芋に手を出しづらい要因だという結果を得た。そこで、干し芋の新たな呼び方を募集し、干し芋会社にも提案する

[ほしいRename]という企画を立ち上げ実施した。実施にあたっては、有名干し芋会社の幸田商店（ひたちなか市）の協力も得ながら準備を進めた。

### 3) 地域志向教育プログラムの修了生

平成 27 年度から開始された本プログラムも 4 年が経過し、平成 30 年度には 61 名のプログラム修了生を輩出した。なお、平成 31 年 3 月末時点では 95 名の 3 年次生が翌年度修了見込み者であった。

## (10) 地域協創人材プログラム部会

### 1) 部門の活動

#### ① 「茨城学」の COC プラス参加校への配信

COC プラス事業大学間連携地域志向科目である茨城大学全学教育機構基盤教育科目「茨城学」の COC プラス参加校への配信を実施した。平成 29 年度は配信のみであったが、平成 30 年度は講師とのディスカッションの時間に、COC プラス参加校との交流を開始した。時間割が合わない茨城高専については、引き続き DVD 録画で学内閲覧可能とすることで共有した。茨城大学では全学必修科目のため 1,669 人、茨城キリスト教大学では 46 人、常磐大学では 54 人、県立医療大学では 47 人の学生が受講した。

また、平成 30 年度から「授業推進ワーキンググループ（茨城 COC プラス推進協議会下部組織）」を設置し、「茨城学」への COC プラス参加校の参画や授業運営の向上・発展のための協議、及び平成 31 年度新規開講科目「地域協創 PBL」の連携実施について協議を重ねた。「茨城学」に関しては、平成 31 年度は茨城県立医療大学が地域医療をテーマに登壇することが決定し、また COC プラス参加校学生乗り入れ型の「地域協創 PBL」の新規開講を機に、本学及び COC プラス参加校間において共通教育プログラム「地域協創人材教育プログラム」の構成科目を中心とした包括的な単位互換協定を平成 31 年 3 月に締結した。

写真 1：「茨城学」VCS 接続中の講堂の様子



写真 2：授業推進ワーキンググループ



② 「仕事を考える」

地域協創人材教育プログラムを構成する就業支援科目として、県内企業へのプレインターンシップ（1 day インターンシップ）を組み込んだ「仕事を考える」を開講し、人文社会科学・理・教育学部の 2 年次を対象とした第 2 クォーターの授業では 41 名が、工・農学部の 1 年次を対象とした第 4 クォーターの授業では 31 名が受講した。



写真 1 「仕事を考える」授業風景（第 2 クォーター）  
お金の知識を学ぶ（日本銀行講師）



### ③ 「インターンシップ実習 I」

学生のインターンシップへの参加を促進するために、「地域協創人材教育プログラム」の認定科目として平成 30 年度より基盤教育科目「インターンシップ実習 I」を新規開講した。平成 30 年度は、人文社会科学部 1 年次の学生と 2 年次の学生 2 名が、当該科目を活用してインターンシップを実施し、単位を取得した。キャリア支援科目やガイダンス等を通して学生のインターンシップへの参加を推進していることから、次年度以降の履修学生の増加が期待できる。

写真 2 「仕事を考える」授業風景（第 4 クォーター）  
女性の活躍を学ぶ（有）モーハウス講師）

## 2) 関連イベント

### ① インターンシップマッチングフェアの開催

インターンシップ科目への関連イベントとして、地域企業との連携強化に向けた学生への情報提供とマッチング環境の整備のため、夏季には「平成 30 年度いばらき COC プラス合同インターンシップマッチングフェア」を平成 30 年 7 月 14 日（土）に開催し、本学及び COC プラス参加校の学生計 64 名が参加した。また、冬季には「平成 30 年度いばらき COC プラス合同若手 OB/OG 交流会&インターンシップマッチングフェア」を平成 30 年 12 月 22 日（土）に開催し、本学及び COC プラス参加校の学生計 57 名が参加した。特に後者のイベントでは「同じ大学出身の先輩からの話を聞くことができ、入社後のイメージがつかみやすかった」「OB/OG の生の声をきくことができ参考になった」等、満足度の高い結果となった。

写真 1：夏季インターンシップマッチングフェア



写真 2：冬季インターンシップマッチングフェア



② 「第 12 回かさま新栗まつり」への出店

平成 29 年 12 月に実施した「マルシェ・ド・カサマロン」の後継プロジェクトとして、平成 30 年度は笠間市にあるパン製造・販売企業協力のもと、「第 12 回かさま新栗まつり」へ出店した。当該プロジェクトは、地方公共団体や企業等と協働した企画・提案型インターンシップとして、学生のアクティブラーニングや PBL といった能動的学習を支援することを目的としたものであり、茨城大学生 6 名が参加し商品の企画・製造・販売の一連の流れをインターンシップを通して体験した。2 日間の出店で、準備した 3 商品（コーヒーマロン 130 個、ゆきぐり 200 個、マロンクリームパン 34 個）を完売した。当該プロジェクト参加学生のうち 1 名が上記「インターンシップ実習 I」に履修を申請し単位を取得している。



出店風景 1



出店風景 2



「ゆきぐり」



「コーヒーマロン」

3) 地域協創人材教育プログラムの認定予定

H28 年度から開始した本プログラムも 3 年が経過し、H30 年度末時点で計 8 名が来年度認定見込み者となった。インターンシップへの単位認定を申請する学生が少ないことが影響していると考えられた。

(11) AIMS プログラム部会

1) AIMS 部門の活動

AIMS (ASEAN International Mobility for Students) プログラムとは、東南アジア教育大臣機構 (SEAMEO) の高等教育開発センター (RIHED) が運営を統括する学生交流促進事業

である。茨城大学は、東京農工大学、首都大学東京とともに「ASEAN 発、環境に配慮した食料供給・技術革新・地域づくりを担う次世代人材養成」というテーマで大学の世界展開力強化事業（平成 25 年度）に採択され、AIMS 加盟校となった。本学は、地域社会の持続的発展の基礎となる安全な地域づくりと環境保全に主眼をおいた「地域サステナビリティ」をテーマとして、「環境変動適応・防災論」や「地域環境管理論」、「環境共生論」、「環境保全型農業論」など 10 科目 15 単位の特色ある AIMS プログラム科目を提供している。

当初、これらの科目は農学部専門科目として開講されていたが、平成 30 年度には全学教育機構共通教育部門の AIMS プログラム部会が茨城大学 AIMS プログラム運営委員会と連携して管理運営する体制を整え、大学共通科目としての運用を本格化した。国際交流の促進に向けて協定校との連携をさらに拡大した結果、ボゴール農科大学、ガジャ・マダ大学、スリウィジャヤ大学、カセサート大学に加え、ブルネイ・ダルサラーム大学から留学生が来日することとなり、計 19 名の AIMS 学生を農学部特別聴講学生として受け入れた。

なお、「大学の世界展開力強化事業」による AIMS プログラム補助事業は平成 29 年度で終了したものの、引き続き 3 大学が協力して運営体制を継続し、授業科目の乗り入れや事前共通教育を行うこととなっている。同事業の事後評価においては、我が国の大学教育をけん引し、更なるグローバル展開力に寄与していくことが期待されるとして、文部科学省の大学の世界展開力強化事業プログラム委員会より S 評価を受けた。

## 2) AIMS 関連イベントの報告

AIMS プログラム科目は主に AIMS 加盟大学からの留学生を対象とする科目群であるが、本学学生も英語による専門科目への挑戦、あるいは留学の準備として受講することが可能である。受入学生に対しては、授業科目の開講のみに留まらず、来日期间全体を通して受入プログラムとして管理運営しており、入国から帰国まで担当教職員が一貫してサポートを提供することで、受入学生の安全管理と満足度の向上に寄与している。



### 【地域サステナビリティ学特別講義 II】

また、地域サステナビリティ学セミナー・ラボワーク（計 3 単位）を設定し、学生たちの希望に沿って研究室に配属して継続的な実験・実習の機会を提供することで、十分な研究体験

を与えることで、本学学生との密接な交流を実現している。また、研究室配属により修士課程への進学が促され、これまでに AIMS 受入学生 2 名が国費留学生（大学推薦）として大学院農学研究科に入学している。



【ラボワークの様子（カセサート大学からの受け入れ学生と園芸学研究室・望月助教）】

AIMS による交換留学生の増加にともない、相互交流の機会が飛躍的に増加している。特に、学生が組織した留学生支援サークル“Let's Hang Out”が中心となって様々なイベントを行い、留学生の受け入れ環境向上に寄与している。これらの活動により、日本人学生も英語運用能力を身に付け、派遣プログラムへの参加が促進されている。



【学生サークルによる AIMS 受入学生送別会】

平成 30 年度はグローバル教育センターの瀬尾講師が中心となって申請した中島記念交流財団の助成「地域住民を交えた留学生支援及び地域の国際理解促進」が採択され、阿見町国際交流協会と協働で阿見キャンパスの留学生・日本人学生と阿見町民との交流事業を行った。9 月には、留学生・日本人学生・町民が参加した異文化理解入門ワークショップ及び新入留学生歓迎交流会を開催した。10 月から 1 月にかけては、本学の留学生と地域の在留外国人に向けた日本語授業（毎週水曜日）、English カフェ（月 1 回）、地域住民に向けた留学生による各国紹介イベント（月 1 回）、2 泊 3 日のホームステイ（11 月）、ホームステイ報告会（1 月）を実施した。



【English カフェ】



【文化紹介イベント（タイ）】

## (12) 大学院共通科目部会

### ○ 部門の活動（特色ある業務）

本学では、大学院教育を限られた専門分野にとどめず、広い俯瞰的な視野とコミュニケーション力、創造性と想像力を育成する組織化された教育を行うため、大学院共通カリキュラムを導入している。各大学院研究科が協力して大学院共通科目部会を運営して「科学と倫理」や「国際コミュニケーション基礎 A」、「研究と教育—知の往還をめぐって—」、「食料の安定生産と農学」など 22 科目の特色ある大学院共通科目を提供している。

今年度は大学院共通科目の継続性が求められ、提供科目は昨年と同じものとなったが、来年度は中央教育審議会大学分科会における審議まとめ「2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿」をふまえて、大学院共通カリキュラム実施要項を抜本的に見直す予定である。

## (13) AI・データサイエンス専門部会

### ○部門の活動（特色ある業務）

SDGs や超スマート社会（Society5.0）、第4次産業革命など、社会変化が激しく予測不可能な時代において、数理・データサイエンス教育が未来社会を開くと期待されている。本学では IT 基盤センターおよび工学部、全学教育機構の教員で「AI・データサイエンス入門」と題したパイロット授業を第4クォーターに全8回のオムニバス形式で行った。授業アンケート結果から、受講生の理解度、満足度とも 87.5%と高評価であった。さらに、同科目の幾つかの内容を日立市・日立地区産業支援センター・茨城大学連携公開講座や茨大 1day キャンパス in 土浦二高で行うことで、地域社会および学外教育に対しても貢献した。（資料 2-B-05） なお、令和元年度から、「AI・データサイエンス入門」を正規の授業として2本開講するとともに、新たに、「AI・データサイエンス基礎演習」と題したパイロット授業を開講する。（資料 2-B-01、2-B-02）

## ○ 学生支援部門

### 1. バリアフリー推進室関連 (資料 2-C-51\_2018 バリアフリー活動実績、資料 2-C-52\_ピアサポーターの認定制度承認資料)

① 3 キャンパスにおける相談体制強化を図り、相談件数は前年度を更に上回った。

バリアフリー推進室	区分	水戸	日立	阿見	計
キャンパス別 相談件数	延べ人数 (名)	1100	404	351	1855
	実人数 (名)	143	53	52	248

※過去相談件数との比較

2017 年度にバリアフリー推進室が全学教育機構下に入り本格始動してから、3 キャンパスでの相談体制を整備し、相談件数は格段に伸びた。2018 年度は前年度を更に上回る相談件数となっている。

2016 年度 (水戸キャンパスのみ) : 延べ人数 307 名 実人数 41 名

2017 年度 (水戸・日立・阿見 合計) : 延べ人数 1519 名 実人数 201 名

② 授業等における合理的配慮手続き

配慮に向けての相談及び実際の手続き等を行った人数 13 名

※ これら学生が受講する各授業の配慮内容検討と各部局との適切な配慮の調整等をコーディネートした。

③ 平成 31 年度入試における障害等のある入学志願者の事前相談

受験上等配慮人数 実人数 14 名 (前期入試、後期入試)

※ 申請のあったこれら受験者の適切な配慮について、受験者とのやり取り、当該部局との適切な配慮の調整等を行った。

④ ピアサポーターの育成

茨城大学学内における認定制度を新たに整備し、事前研修を行った後に全学教育機構長による認定を受け正規活動を行う形を整えた。

・ 養成講座 (研修会) 開講 : 計 8 回

1) 4 月 27 日 「カウンセリングマインド」

2) 5 月 25 日 「発達障害を理解する」

3) 6 月 21 日 「精神障害を理解する①」

4) 7 月 2 日 「精神障害を理解する②」

5) 7 月 31 日 「カウンセリングマインド②」

6) 3 月 7 日 「パソコンテイク講座①」 外部講師 茨城県聴覚障害者福祉センター

7) 3 月 8 日 「パソコンテイク講座②」 外部講師 茨城県聴覚障害者福祉センター

8) 3 月 20 日 「ピアサポーターとしての基本的な心構え」

・ ピアサポーター・ゆめ大会サポートボランティア情報提供希望登録者数 130 名

⑤ アクセシビリティリーダー養成（講座開講）

多様な可能性を開拓する社会の構築推進をしていくために、必要なアクセシビリティに関する知識・技術・経験とコーディネート能力をもった人材を輩出することを目的とした、アクセシビリティリーダーの育成のための体制整備等を行った。

2018年度は、昨年度に引き続きアクセシビリティ教育第1課程の承認をアクセシビリティリーダー育成協議会より得て所定の講座を開講し、本学からアクセシビリティリーダー認定試験2級合格者9名（内、学生8名、教員1名）を輩出した。

⑥ 障害のある学生を対象とした自主学習室の整備

2017年度に開設し、試験的に運用していた主に発達障害や精神障害のある学生の学習や休息のスペースである自主学習室(やすらぎルーム、水戸キャンパス共通教育棟1号館131室)について、運用を本格始動した。

## 2. キャリアセンター関連

① 就職ガイダンス（資料2-C-01：就職ガイダンス実施日程）

日時：毎週水曜3限

開催回数：36回（水戸キャンパス）

参加者：合計2344名

場所：図書館3F ライブラリーホール ほか

内容：学生のインターンシップ参加や就職活動支援ガイダンス

※ 日立・阿見キャンパスでも開催しており、2018年度は各々63回、36回開催された。

② 説明会

1) 合同企業説明会（資料2-C-02：合同企業説明会）

日時：2019年3月1日（金）、2日（土）、3日（日）10：00～16：00

場所：図書館1F 共同学習エリア

内容：学部3年生、修士1年生を対象とした就職のための企業説明会

参加者：学生延べ人数603名、企業216社

※ 日立キャンパスでも開催しており、2018年度は企業研究会を2019年2月18日（月）～21日（木）、企業説明会を2019年3月1日（金）、4日（月）、5日（火）に開催した。

参加者：学生延べ人数1445名、企業226社

2) 国家・地方行政団体等業務説明会（資料2-C-03：国家・地方行政団体等業務説明会）

日時：2019年1月31日（木）12：00～16：10

場所：図書館1F 共同学習エリア

内容：学部3年生、修士1年生を対象とした行政機関説明会

参加者：学生延べ人数609名、30団体

③ インターンシップマッチングフェア

1) 茨城大学学内インターンシップマッチングフェア キャリアセンター主催（資料2-C-04：イ

インターンシップマッチングフェア [学内])

日時：2018 年 6 月 13 日 (水) 12:40 ~ 14:40

6 月 20 日 (水) 12:40 ~ 14:40

11 月 14 日 (水) 14:00 ~ 16:00

場所：図書館 1 階共同学習エリア

内容：茨城県内企業への就職を考える、学部 1 年~3 年生を対象とした、インターンシップマッチングフェア

参加者： 6 月 13 日 17 社 学生参加人数 97 名

6 月 20 日 18 社 学生参加人数 77 名

11 月 14 日 12 社 学生参加人数 31 名

2) 地元企業を学ぼう・インターンシップマッチングフェア COC プラス事業と共催 (資料 2-C-05: インターンシップマッチングフェア [COC+07])

日時：2018 年 7 月 14 日 (土) 13:00~16:10

場所：駿優教育会館

内容：学部 1~3 年生を対象とした企業等 26 社のインターンシップマッチングフェア

参加者：64 名 (内茨大生 15 名)

3) 業界研究・インターンシップマッチングフェア COC プラス事業と共催 (資料 2-C-06: インターンシップマッチングフェア [COC+12])

日時：2018 年 12 月 22 日 (土) 13:00 ~ 16:30

場所：駿優教育会館

内容：学部 1~3 年生を対象とした企業等 19 社のインターンシップマッチングフェア

参加者：57 名 (内茨大生 19 名)

④ インターンシップ参加手順などの整備 (資料 2-C-07: インターンのご提案)

インターンシップについての手続方法や取扱がわかりづらいところが見られたため、学生向けとして「インターンシップの手引き」を新たに作成し、就職ガイダンスにて活用した。また、新規でインターンシップを検討している企業等に向けて「5 つのインターンシップのご提案」を作成した。

⑤ 業界研究

1) 「就活応援バスツアー 茨キャリ号」キャリアセンター主催

日時：2019 年 2 月 18 日 (月) 9:00~17:00 (資料 2-C-08: バスツアー)

場所：水戸プラザホテル、リコージャパン茨城、全国農業協同組合連合会、株式会社常陽銀行

内容：企業を訪問し、会社説明・職場見学・若手職員との座談会・質疑応答

参加者：22 名

2) 業界研究会 (資料 2-C-09: 業界研究会)

日時：10 月~2 月

場所：キャリアセンター

参加企業：17 業界

内容：学生が直接業界の情報が濃密にできる機会として学内に企業を迎え開催

⑤ 実践的な就職支援

1) 未内定者向けキャリア相談

開催日：8月20日、22日、9月10日、12日

内容：夏時点で未内定の者に向けた就職相談会

参加者：11名

2) 面接練習会

開催回数：8回

参加者：70名

3) グループディスカッション対策講座

開催回数：22回

参加者：226名

4) 就職模擬面接会 人文学部と共催

開催日：2019年1月10日（木）

場所：人文学部

内容：2社の企業人事担当者を迎えての模擬面接会

5) 内定者セミナー

開催日：2019年1月16日（水）

場所：図書館1階共同学習エリア

内容：今年度内定の決まった4年生による3年生への就活のノウハウの説明会

6) 内定者による就活支援サークル‘With’主催の講座・イベント

開催日：1月～2月 複数回開催

場所：キャリアセンター

内容：これから就職活動をする3年生に対しグループディスカッションの練習、キャリアセンターイベントの広報等

⑥ 就職支援関連における上記以外の活動

・キャリア教育

1年次からの体系的なキャリア教育の構築に関しては、身近な社会を知る1年次の「茨城学（必修）」を引き継ぐ形で、前年度に引き続き1年次第4クォーター、2年次第2クォーターに「仕事を考える（選択）」をCOC及びCOCプラス事業と連携して開講した。また、今年度は新たに1・2年生対象に「インターンシップ実習（1単位・選択）」を開講した。更に、日立キャンパスにて2年次が履修できる「キャリアデザイン論（1単位・選択）」を次年度新たに開講する方向で体制整備等を行った。次年度開講予定の3年次「ライフデザイン（必修）」を各学部と協議のもと体制整備等を行った（学部別に12授業開講）。

・茨大キャリアナビの機能強化

キャリアセンターで利用している就職支援システム「茨大キャリアナビ」の機能を活用し効率化と活性化を図った。WEB 予約による効率化、更にキャリアカウンセラー、キャリアセンター教職員、ハローワークジョブサポーターのキャリア相談に関する全ての情報についてシステムによる一元管理、相談学生の状況などを共有しオンタイムでの把握などを行えるようにした。なお、これらの情報共有については 3 キャンパスのどこからでも登録・予約・相談記録の入力・確認ができ、3 キャンパスの格差低減に寄与できた。また、予約無しの相談にも随時できる限り対応した。

・iOP の周知

iOP を広く周知するための「iOP ラボ」の企画運営を行い、キャリアセンター企画として留学生向け WORK IN JAPAN、つまみぐインターンシップ、企業の魅力プレゼン大会、2020 年式採用基準教えますなど、10 月～2 月にかけて計 10 回開催した。

・留学生を対象とした就職支援

JICE 日本国際協力センターと連携し「留学生のための就職研修会」を 3 地区、各 5 回開講（水戸 10/15、29、11/12、26、12/10、日立 10/22、11/5、11/19、12/3、12/17、阿見 10/23、11/6、11/20、12/4、12/18）で実施した。

・キャンパス間の格差是正

3 地区に就職支援担当部署を置き、キャリアカウンセラーによる就職相談、就職ガイダンスをはじめ各種就職支援が同様に行われる体制をとっており、9/28 に「カウンセラー会議（3 地区）」を実施し、各キャンパスの情報共有及び課題共有を行った。また、キャリアセンター専任教員が日立・阿見キャンパスに出向き、各キャンパスの課題把握に努めた。

・海外インターンシップ

「日立オートモティブズ（HAMS）海外事業所インターンシップ」を工学部主導のもとサポートし実施（約 2 週間の本格的な海外インターンシップ、理工学研究科学生対象、ドイツ 1 名、中国 1 名）、「青年中国上海スタディーツアー」実施（茨城県国際交流協会主催、キャリアセンターサポート、3/4～8 実施、参加学生 12 名）

3. はばたく茨大生 春企画主催（資料 2-C-10：はばたく茨大生実施概要）

（ア）日時：2018 年 4 月 5 日（木）11:30～13:00

場所：図書館 1F ラーニングコモンズ

内容：武道館における入学式後の昼休み時間を利用したプレ新歓祭において、新入生及び新入生の保護者らを対象に前年度行われた各種学外学修（発展学修、教育 iOP、海外学修、ボランティアなど）の事例報告をポスター発表形式（活動した学生がポスター脇に立ち自由に質疑応答できる形式）により行った。

成果：特に参観人数調査やアンケート調査は行わなかったが、多くの来場者があり、質疑応答する場面も見られ、茨城大学における学外学修（iOP）の認知アップが少なからずできたと思われる。

（イ）日時：2018 年 4 月 18 日（水）～ 5 月 30 日（水）

場所：図書館 1F ラーニングコモンズ

内容：昨年度実施された学外学修事例について、ディプロマポリシーに沿った 4 テーマ

(地域活動、企業や学校でのインターンシップ、海外での活動、専門を生かした学外活動)に分類し、各テーマ1週間ごとにポスター展示、発表期間内に2回、活動者によるフリーの質疑応答時間を設けた発表を行った。企画の主な目的は、1年次からのiOPに向けた準備啓発であったため、「大学入門ゼミ(基盤・必修)」を通じて1年生の参加を促し、テーマ毎に必ず1回参観するよう興味惹かれた活動への投票などの企画を行った。獲得票数の最も多かった活動に対しては、本企画終了後に表彰をして称え、今後の活動の活性化を図った。

成果:前年度に比較して1年生の参観者は増し、iOPの認知や早期からの準備の必要性といった意識が少なからずアップしたと思われる。しかし、1年生全員の参加には至らず、iOPへの準備に対する意識はまだ弱く、更なる企画改善が必要と思われた。

#### 4. 学長と学生の懇談会 主催 (資料2-C-11:2018前期 学長と学生の懇談会の実施報告書、資料2-C-12:2018後期 学長と学生の懇談会実施報告)

##### ① 2018年度 前期 学長と学生の懇談会

日時:2018年7月11日(水)14:30~17:00

場所:水戸キャンパス 共通教育棟2号館4階 41番教室

内容:学部2年次以上(理工学研究科1年次含む)を対象として、これまでの学生生活全般を通して感じたことから、茨大における学修環境及び学生生活の向上に向けて様々な視点から意見要望を出してもらい、三村学長の進行のもとクリッカー(即時型集計処理機器)を活用し議論を深めた。出された学生の意見は当該部局に問い合わせ、対応内容一覧を学内に掲示し学生への周知を図り、学生と教職員とのパートナーシップ向上を目指した。

参加者:学生51名(5学部:2~4年生、理工学研究科:1年生)、教職員13名(三村学長、太田理事・副学長ほか)。

成果:懇談会終了後の参加学生を対象としたアンケート調査結果から、概ね目的は達成されたと判断された。

##### ② 2018後期 学長と学生の懇談会

日時:2019年1月16日(水)14:30~17:00

場所:水戸キャンパス

社会連携センター3階 研修室

内容:新入生を対象に大学入学前後での大学生活における印象の違いをはじめ、大学生生活全般で感じたことなどについて、クリッカー(即時型集計処理機器)を用いて学長が質問しながら議論を深めた。学生から出された意見は当該部局に問い合わせ、対応内容一覧を学内に掲示し学生への周知を図り、学生と教職員とのパートナーシップ向上を目指した。

参加者:学生48名(5学部、1、2年生)、教職員10名(三村学長、太田理事・副学長ほか)。

成果:懇談会終了後の参加学生を対象としたアンケート調査結果から、概ね目的は達成されたと判断された。

5. 学生支援に関する FD/SD の開催 (資料 2-C-13 : ゲートキーパー養成講座実施報告書)

① 工学部学生支援の協業について

参加者 : 工学部 教員 70 名、職員 7 名

日時 : 2018 年 7 月 18 日 (水) 13:15~13:45

場所 : 工学部 E5 棟 8 階イノベーションルーム

② ゲートキーパー養成講座

参加者 : 教職員 64 人 (水戸 48 人、日立 9 人、阿見 7 人)

日時 : 2019 年 2 月 12 日 (火) 13:00 ~16:00

場所 : 水戸キャンパス図書館ライブラリーホール・セミナールーム (日立・阿見キャンパス VCS 配信)

成果 : 講座終了後の参加者を対象としたアンケート調査より、参加者全てにおいてゲートキーパーの理解が深まり、特に参加者のうち 38% が自身にとって非常に有益な内容だったと評価していることが確認された。今回の参加者は全学の教職員数に対しては非常に少なく、今後更にゲートキーパー等の認知を広めるための機会の提供が必要と考えられた。

6. 各学部における学生担任マニュアルの制度化 (資料 2-C-14 : 全学向け参考用学生担任マニュアル 評議会承認資料)

学生支援部門会議及び中央学生委員会にて意見交換及び調整をし、各学部で学生担任マニュアルを作成し、それに基づく担任制度の実施充実を図ることを決定し、学生支援部門にて見本となる学生担任マニュアルを作成し、全学的に実施することが評議会をはじめ全学の会議にて了承された。2019 年度は見本マニュアルを参考にして各学部用に調整した学部学生担任マニュアルを作成し試験的に実施し、2020 年度に本格実施する予定。

7. いきいき茨城ゆめ大会 iOP 関連 (資料 2-C-15 : 基盤ボランティア授業シラバス)

iOP 及びボランティア授業単位として認定するための制度整備を行った。

◎ 2019 年度より基盤科目において「(公共社会) 多様性社会に関わるボランティア活動」

(各 1~4Q・1 単位) として障害に関するボランティア活動を登録できる授業の開講準備を行った。

◎ 各種日程調整

- ・ iOP 及び授業単位としての登録に関する説明会 2019 年 6 月開催
- ・ 事前基礎講座 (バリアフリー推進室担当)
- ・ 県庁職員による直前説明会) 2019 年 9 月 27 日予定

8. 学内学生生活動支援「除草を目的とした山羊飼育」 (資料 2-C-16 : 山羊飼育活動報告書)

日時 : 実施期間 2018 年 10 月 14 日 (日) ~ 2018 年 10 月 26 日 (金)

場所 : 除草場所 茨苑会館前庭園、夜間飼育場所 教育学部 BC 棟間

内容 : 持続可能な社会及び環境について考える機会として、学内での山羊による除草活動

をCOC統括機構との協働にて行った。活動参加学生の対象として、特に学校教育において動物飼育を取り入れた学習を行っており、その指導に立つ教員においては活動の意義を一度深く考えることは非常に有意義であると考え、教育学部学生とした。参加学生数10名、支援教職員5名。(主催：全学教育機構、後援：COC統括機構・教育学部)

成果：実施後の参加学生との意見交換会及びアンケート調査結果から、将来教員になる人に限らず、大学生全般において有意義な経験であると考えられ、今後大学全体として活動の機会があるとよいといった意見が複数あったことをはじめ、体験学修として有益であったものと推察された。



11月	<p>11月7日－日本体験学習 茶道・華道体験</p> <p>11月9日－公開講座「世界の文化を知る：インドネシアの文化紹介」（阿見町国際交流協会との共同事業）</p> <p>11月9-11日－阿見キャンパス留学生ホームステイ（阿見町国際交流協会との共同事業）</p> <p>11月14日－留学生のための防災訓練</p> <p>11月30日－ウィスコンシン州立大学スペリオル校との授業交流</p>
12月	<p>12月1日-2日 第14回茨城学生国際会議</p> <p>12月15日－阿見キャンパス English Café（阿見町国際交流協会との共同事業）</p> <p>12月15日－公開講座「世界の文化を知る：ブルネイの文化紹介」（阿見町国際交流協会との共同事業）</p>
1月	<p>1月5日－公開講座「世界の文化を知る：タイの文化紹介（阿見町国際交流協会との共同事業）」</p> <p>1月5日－阿見キャンパス留学生ホームステイ報告会（阿見町国際交流協会との連携事業）</p> <p>1月5日－阿見町地域住民との交流会（阿見町国際交流協会との連携事業）</p> <p>1月16日－桜ノ牧高校訪問、文化紹介・交流（日本語研修コースレベル5の留学生による）</p> <p>1月23日－交換留学生向け帰国前ガイダンス（後学期）</p> <p>1月27日－公開講座「日本人とはだれか？多様化する日本社会についてみんなで考えよう」</p> <p style="text-align: center;">「Studies in Contemporary Japan」ポスター発表会</p> <p>1月30日－海外派遣留学生のための危機管理ガイダンス</p>
2月	<p>2月15日－阿見・日立キャンパス向け海外留学危機管理セミナー</p>
3月	<p>3月29日－サポート隊ガイダンス</p> <p>3月30日－留学生同窓会 役員懇談会</p>



新入生ガイダンス



7月7-8日—国際交流合宿研修



11月7日－日本体験学習 茶道体験

### 【部門の活動・特色ある業務】

#### 1. 新規協定校の開拓

- ① スロバキアのコメニウス大学人文学部と茨城大学全学教育機構及び人文社会科学部との間の部局間学生交流協定の締結  
部局間交流協定が締結され、本学学生の留学希望者の多いヨーロッパ圏への派遣枠確保と、留学生の受け入れが期待できる。

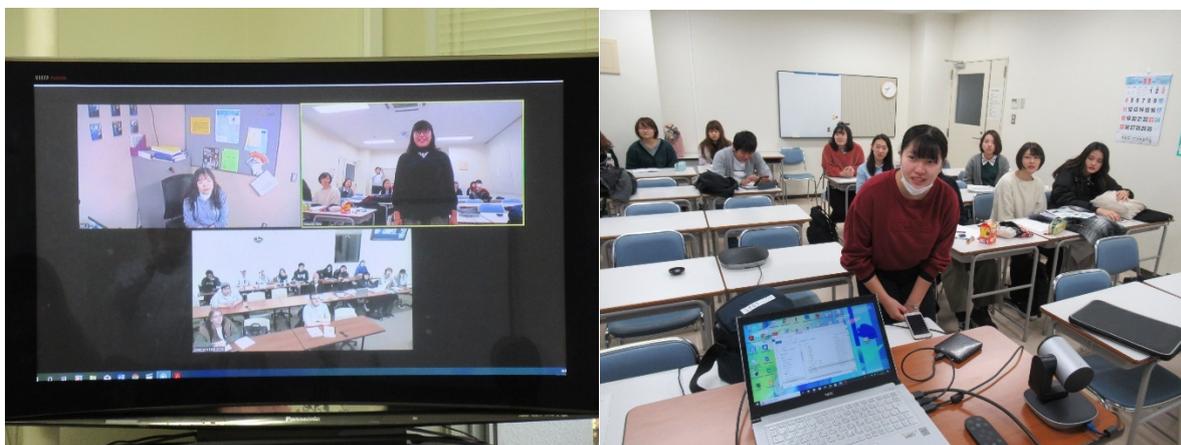
#### 2. 短期海外研修の企画及び実施

- ① 「短期海外研修ⅠⅡ（スペイン）」の開講  
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修ⅠⅡ（スペイン）」を開講した。スペイン・アルカラ大学において夏期短期語学研修が実施され、本学より4名の学生が参加した。
- ② 「短期海外研修ⅠⅡ（ブルネイ）」の開講  
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修ⅠⅡ（ブルネイ）」を8～9月に開講した。ブルネイ・ダルサラーム大学において4週間にわたる英語研修が行われ、本学より27名の学生が参加した。
- ③ 「短期海外研修ⅠⅡ（韓国）」の開講  
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修Ⅰ（韓国）」を開講し、本学から22名（学部生20名、大学院生2名）が研修に参加し、学部生8名が同科目を履修した。
- ④ 「短期海外研修ⅠⅡ（マレーシア）」の開講  
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修ⅠⅡ（マレーシア）」の開講を企画し、実施した。平成30年度10月より募集を開始し、3月に2週間12名派遣した。

- ⑤ 「短期海外研修 I II (サンフランシスコ・ボランティア)」の開講  
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修 (サンフランシスコ・ボランティア)」の開講を企画して実施した。本学より計 9 名 (学部生 7 名、大学院生 2 名) が参加し、学部生 7 名が同科目を履修した。
- ⑥ 「短期海外研修 I II (オーストラリア)」の開講  
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修 (オーストラリア)」の開講を企画し、13 名の学生が参加した。

### 3. 協定校との教育交流 (資料 2-D-03、2-D-04)

- ① ブルネイ・ダルサラーム大学との授業交流  
ブルネイ・ダルサラーム大学で日本語授業を履修している学生と、日本語教育プログラム「日本語教授法 I」を履修する学生とのオンラインによる学生交流を行った。
- ② カナダ・サイモンフレーザー大学とのオンライン学生交流を企画  
サイモンフレーザー大学の日本語授業を履修している学生と、グローバル・イングリッシュ・プログラム (GEP) の『Studying Abroad』科目を履修している学生とのオンラインによる学生交流を企画し、平成 30 年後期 1~2 月に実施した。
- ③ ウィスコンシン州立大学スペリオル校との授業交流  
ウィスコンシン州立大学スペリオル校で日本語授業を履修している学生と、日本語教育プログラム「日本語教授法 I」「日本語教授法 II」を履修する学生とのオンラインによる学生交流を 12 月に実施した。



ウィスコンシン大学スペリオル校の学生と、本学の日本語教育プログラム受講学生とのオンライン交流会

#### 【関連イベント報告】

##### ① 小中学校・高等学校への留学生の派遣

今年度は、以下の県内各校に留学生を派遣し、地域の中学生・高校生と本学留学生との異文化交流を図った。

- ・ 10 月 県立桜の牧高等学校 (3 名派遣)

- ・10月、1月 県立桜の牧高等学校城北校（12名派遣）
- ・11月 水戸第一高等学校（16名派遣）
- ・11月 竜ヶ崎市立八原小学校（19名派遣）

## ②学生国際会議の開催

平成30年12月1・2日、第14回茨城学生国際会議が開催した。本学の大学院生が主体となり企画運営をし、2日間で茨城大学の学生・留学生のほか、県内の高校生を含む166名が参加し、学生等による学術発表がすべて英語で行われた。また、昨年に引き続き、2日目の午後に水戸市内エクスカッションを企画した。また、ドキュメンタリー映画「Happy～しあわせを探すあなた～」の上映会および本映画のプロデューサーを招き、参加学生との活気あふれるディスカッションが行われた。（資料2-D-05、2-D-06）

## ③日本語教育プログラム「日本語教授法演習(海外)」

「日本語教育プログラム」の最終科目である「日本語教授法演習(海外)」では、「日本語教授法演習(海外)」の実施校にウィスコンシン州立大学、アイダホ州立大学、レンヌ第一大学が2017年度から加わり、7校となった。また、同科目は「海外協定校におけるインターンシップ型日本語教師養成プログラム」として日本学生支援機構の平成30年度海外留学支援制度（協定派遣）短期研修・研究型（タイプA）に採択され、平成30年度には3名が派遣された。

平成30年度は、ブルガリアのソフィア大学とタイのトゥラキットバンディット大学にそれぞれ1名が留学し、「日本語教授法演習(海外)」の授業の一環として日本語クラスで実習を行った。

## ④地域住民との交流

公益財団法人中島記念国際交流財団の助成を受け、阿見町国際交流協会の連携事業として、茨城大学阿見キャンパスで学ぶ外国人留学生・日本人学生と阿見町に住む地域住民の交流を目指して、以下の活動を行った。

### （1）地域と大学が連携した新入留学生ガイダンスの実施

新入留学生が来日してすぐの9月に、阿見町国際交流協会のメンバーに町の観光名所、ごみの出し方やスーパーの場所など生活に必要な情報を紹介いただいた。その後、留学生・日本人学生・地域住民はシミュレーションゲーム「バーンガ」を通して異文化コミュニケーションを体験し、どのように互いに理解し合えるかを話し合った。

### （2）留学生が日本人学生及び地域住民に向けて自国の文化を紹介するイベントの開催

インドネシア（11月）、ブルネイ（12月）、タイ（1月）の留学生が日本人学生と地域住民に向けて、自国の文化を紹介した。文化紹介後は、小グループに分かれてそれぞれの国の料理や飲み物を楽しみながら、さらなる交流を深めた。

### （3）留学生と地域に住む在留外国人に向けた地域住民による日本語講座の開講

10月～1月の毎週水曜日に大学のキャンパス内にて、地域住民のボランティアが留学生に対して日本語の指導を行った。また、留学生が日本語を学ぶだけでなく、地域住民が英語を学べるよ

う、11月と12月には、英語で交流をする English Café を行った。地域住民と留学生がそれぞれ学習中の言語を使いながら交流することで、言語学習の大変さを改めて知るよい機会となった。

(4) 留学生と受入ホストファミリーの双方が学び合えるホームステイの実施

留学生と地域住民の交流が深められるよう、11月に2泊3日のホームステイを実施した。ホームステイには、15の家庭が参加し、19人の留学生を受け入れた。ホームステイ期間中は、一緒に日本料理を作ったり、茨城県内の観光地に行ったりと、それぞれの家庭で交流を楽しんだ。



[資料：留学生向け日本語教育（単位なし）]

前期

科目名	担当者	開講地区	担当回数	開講回数
日本語レベル1（総合）	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル1（総合）	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル1（総合）	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル1（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル2（総合）	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル2（総合）	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル2（総合）	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル2（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル3（総合）	八若壽美子	水戸	15	15

日本語レベル3 (総合)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル3 (口頭表現)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル3 (漢字)	瀬尾匡輝	水戸	15	15
日本語レベル4 (総合)	瀬尾匡輝	水戸	15	15
日本語レベル4 (総合)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル4 (口頭表現)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル4 (漢字)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル5 (総合)	安龍洙	水戸	15	15
日本語レベル5 (総合)	非常勤	水戸	15	15
多読で学ぶ日本語	池田庸子	水戸	15	15
日本事情	安龍洙	水戸	15	15
日本語入門 IA	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語入門 IB	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語初級 I	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語初級 II	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語中級	瀬尾匡輝	阿見	10	10
非漢字圏の人のための漢字	瀬尾匡輝	阿見	10	10

## 後期

科目名	担当者	開講地区	担当回数	開講回数
日本語レベル1 (総合)	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	安龍洙	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル3 (漢字)	安龍洙	水戸	15	15
日本語レベル3 (口頭表現)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル4 (総合)	瀬尾匡輝	水戸	15	15
日本語レベル4 (総合)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル4 (口頭表現)	非常勤	水戸	15	15

② 部門の活動 [平成 30 年度の活動・特色ある業務]

日本語レベル 4 (漢字)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル 5 (総合)	安龍洙	水戸	15	15
日本語レベル 5 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本事情	安龍洙	水戸	15	15
日本体験学習	安龍洙・塚田純	水戸	15	15
集中日本語入門コース	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語入門 IA	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語入門 IB	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語初級 I	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語中級	瀬尾匡輝	阿見	10	10
非漢字圏の人のための漢字	瀬尾匡輝	阿見	10	10